

医学教育センターニュース

6月号

編集・発行 医学教育センター広報ワーキンググループ

June 2008年

発行No.0806AB

医師として必要となる英語力を鍛える「ジャーナルクラブ」(2学年次授業科目)が今年で4年目を迎えました。今号では、本授業科目開講以来、毎年進化続けてきた授業の内容とともに、実際に今受講中の学生の感想を紹介いたします。

きっかけは「医学英語を勉強しておけばよかった」という卒業生の声

「国家試験に無事合格し研修医として病院勤務が始まりました。周りの先輩や同輩は他大学を卒業してきた人ばかりです。学生時代もっと勉強しておけばよかったと思いますが、特に医学英語をちゃんと勉強してこなかったことがとても悔やまれます。医学論文を読む勉強会があると、まわりの仲間たちは英文をスイスイと読んでいくのに自分だけが読めない。後輩たちにはこんな情けない思いをさせたくない。」これは、皆さんの先輩である卒業生の声です。このジャーナルクラブを開講する1つのきっかけとなりました。

毎年進化続ける医学英語教育プログラム

2005年に10名のチューターで始めた「ジャーナルクラブ」は、毎年ご協力して下さるチューターの数が増え、今年度は基礎医学部門、臨床医学部門から48名の先生方にご協力いただいております。またプログラム自体も、学生の感想やチューターの意見を取り入れ、毎年少しずつ改良してきました。現在では次のような流れで進めています。

まず、課題論文の英文は、全学から推薦いただいた論文や医学に関する記事などから選んでいます。今年の5月の課題は、ピロリ菌とプリオンの発見に関するノーベル生理学医学賞の紹介記事でした。

その課題論文を、学生は個人で予習をしてセミナー室に集合し、小グループで疑問点を出しあい、分かりにくいと感じた部分について用紙に記入して提出します。そこで出された英語の構文に関する質問は、“e-learning”の時間に基礎科学部門の英語教員がパワーポイントを使って解説します。文法的な疑問がある程度解くことができたなら、再び個人でさらに読み進めレジメに要旨をまとめます。発表の授業ではチューターが各学生の理解度を測るために口頭試験をしたあと、内容に関して全員でディスカッションをして内容を深めたり、チューターが関連情報を解説したりします。また、後期には、その場で新しい論文を提示し、辞書を使って一人の力で制限時間内に読んで内容を素早くつかむ訓練も行います。

コンピュータを使った個別学習

隔週で行う e-learning の時間では「メディカル英語」のソフトを用い、ヘッドフォンをかけて診療英会話の練習やリスニングをトレーニングします。また、医療記事を用いた速読トレーニングや医学語彙を覚え発音練習をします。

最後に臓器名などの身体に関する基本語彙を、各学生が正確に発音し意味が言えるようになったかどうかを英語教員が一人一人チェックしています。



現在受講中の2年生からの感想

自主性を持ち、楽しんで取り組む

107022 大西 知 広

ジャーナルクラブでは、英語の医学論文を読んでいくグループワークと、パソコンを用いての e-learning との 2 つのパートに分かれています。グループワークでは、今年、医学に関するノーベル賞の英文を用いています。知らない単語が多く、専門的で難しい内容が含まれてはいますが、文章自体は比較的読みやすいもので、内容も興味を持ちやすいものでした。英文を読む上で、文中に出てきた単語をおさえつつ、読み進めていけば、医療に関する知識も得られるし、文章を読むことに慣れていけるとと思います。また、チューターを含む学生数名で、協力し合いながら学習をするので、内容理解も深まると思います。

e-learning では、医療英単語、リーディング、リスニングを学習していきます。どの項目も音声を聞きながらなので、英語の発音もおさえられます。パソコンを用いての授業のため、各々が個人のペースで進めていけるし、自分のおさえたい分野を重点的に勉強できますし、楽しんで取り組むことで英語の学習が効果的になるのだと思います。どちらのパートも受動的に「聞く」だけの授業でなく、自主性を持って学習に取り組むことができる授業だと思います。これからの医療の分野において、英語は必要不可欠なものなので、このジャーナルクラブの時間を通じて、多くの英語に接していくことが大切だと思います。

大西君(写真左端)ら論文講読(グループワーク)班の様子



仲間の疑問や指摘が理解を深める

107032 加藤 友 理 子

2年生からジャーナルクラブが始まりました。はじめて聞く授業であり、一体どんなスタイルの授業なのだろうかと様々な期待と不安がありました。この授業はパソコンで医学英語を学ぶグループとセミナー室で医学系の英語論文を読むグループに分かれて学習するというものでした。パソコン学習では語彙や診察でのダイアログを学びますが、ヘッドホンをつけて発音を確認することができます。以前に英語の教科書で習ったものも、目から耳から再び学習することで定着していくことを実感しています。グループ学習では6、7人のグル

加藤さん(写真右端)ら e-learning 班の様子



ープで論文を読み進めていきます。個々人で読んだ時は何気なく読みすごした文も、仲間の疑問や指摘により話し合うことでより深く理解していくことができ、そして使用する論文は先生方が選んでくださったものなので興味深く、英語だけでなく医学の知識も広がっていき、楽しく学習しています。

現在、ほとんどの論文が英語で書かれているということで、自分は将来それについていくことができるのかという不安がありました。今はこのジャーナルクラブを通して、少しずつでも力をつけていこうという意欲であふれています。

将来医師としての幅をひろげるために

先日、5年生の一人と話をしていましたら、臨床の授業で病気について勉強していると、e-learning で覚えた単語が出てきたり、医学論文を読んでいくグループワークで取り扱った英文に書かれていた内容が思い浮かんだりして、ジャーナルクラブ時から蓄積されるようになった知識同士が繋がってくると言っていました。

また、現在、卒業後の研修先の病院を決める際には、研修希望者の選択と研修病院の意向を踏まえて、マッチングと呼ばれるシステムで組み合わせが決定されています。その際に英語論文の読解試験を課す研修病院が増えているようですが、今後はそうした試験にも自信を持って臨んでいってほしいと思います。そして、医学英語の勉強を続けることで、将来医師としての幅をどんどん広げて行ってほしいと思います。

医学教育センター 医学英語教育推進プロジェクト ワーキンググループ 長 山 森 孝 彦